

Title	100年に及ぶポンティニーからスリジーまでの歴史
Author(s)	津田, 雅之
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2012, 7, p. 255-262
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9810
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

100年に及ぶポンティニーからスリジーまでの歴史

津田 雅之*
TSUDA Masayuki

Intellectual and Scholarly Encounters for a Century from Pontigny to Cerisy

Keywords : European intellectuals, La Nouvelle Revue Française, interdisciplinarity,
Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter, hospitality

キーワード : ヨーロッパの知識人, 『新フランス評論』, 学際性, 『ヨーロッパ文学とラテン中世』, ホスピタリティ

Chaubet, François., Heurgon, Édith., et Paulhan, Claire., (sous la direction de), *SIECLE Colloque de Cerisy : 100 ans de rencontres intellectuelles de Pontigny à Cerisy*, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, Condé-sur-Noireau, 2005, 544pp.

最先端の研究を志す人文学研究者にとって、国際学会で発表することが刺激となることは言うまでもない。文化的背景の異なる未知の他者との議論により、発表者の学会参加後の研究における緊張感を必然的に高めることになるからである。また、国際学会を組織することは政治的営為にはかならず、組織者は、個人による研究とはかなり異質の葛藤を抱えることになる。

フランスのノルマンディー地方の、元々は古城であったスリジー＝ラ＝サル国際文化センターは、国際学会の中でも第一線の研究者が数多く参加する磁場として、世界的に知られている。夏期に開催されることの多いスリジーの第一の特徴は、文学が中心とはいえず学際的であること。第二の特徴は、外国人の参加者の割合が高いため、自国中心主義的なフランスの学術研究に摩擦をもたらさうということである。それから、議論の高い質のみならず、参加者が風光明媚な風景の広がっているスリジーの宿泊施設や料理や図書室といったホスピタリティの面にも満足することでも有名である¹。しかし、フランス文学やフラ

* 大阪大学大学院文学研究科・博士後期課程大学院生

1 「ノルマンディーの平野や大小の起伏を、りんご畑や乳牛が草をはむ牧草地を眺めながらつぎつぎと車で通りすぎ、スリジーの城館に到着した。広大な庭園にそって並ぶ榆の木が大西洋からの強い風に吹かれていた。城館の中心には大きな暖炉のある広間があり、私たち参加者はあちこちの小部屋に分宿することになった。回り階段の奥や、物見の塔や、二階の舞踏室など、大小三十

ンス哲学の研究者を除いては、スリジーの前身がブルゴーニュ地方の修道院でのポール・デジャルダン²の主催していたポンティニー旬日懇話会 *les décades de Pontigny* であったことはあまり知られていない。

この論文集は、ポンティニーが20世紀初頭に始まってから一世紀になるのを記念し総括するためにスリジーで2002年に開催された学会を元にして、2005年に出版されたものである。出版された直後の書物ではないが、日本語による書評は皆無なので、紹介する価値はあるだろう。編者は、アンドレ・ジッドやポール・ヴァレリーやロジェ・マルタン・デュ・ガールの陰で名声に恵まれなかったデジャルダンやシャルル・デュ・ボスやジャン・シュランベルジェにあえて光を当てつつポンティニーに関する博士論文³を書いたフランソワ・ショーベ、デジャルダンの孫でありスリジーの運営責任者の一人であるエディット・ウルゴン、写真を豊富に使ったポンティニーとスリジーの概説書⁴の著者でありジャン・ポーランの孫でもあるクレール・ポーランの三人である。イギリス人やドイツ人やアメリカ人も含む総勢37名の執筆陣は、文学関係者のみならず、哲学研究者、歴史家、精神科医、編集者、社会学者、政治学者、経済学者、科学史家、文化人類学者、都市研究者、文書館員から構成されており、学際的なポンティニーとスリジーの性格を物語っている。学術的な体裁の論文から柔らかい語り口の回想録まで様々な形式の論考が混在しており、また、重複しているトピックも多い。

この書物は、全4章に分かれている。第1章では、近現代におけるインテレクチュアル・ヒストリーの専門家であるミシェル・トレビシュの基調講演が章全体として収められている。第2章は、リベラルな文芸雑誌『新フランス評論』*La Nouvelle Revue Française* 周辺の高遊民的な文学者達の集う知的な会合であったポンティニーをめぐって、その起源や文学者達の議論や交流の様子が紹介されている。その際、ミシェル・ヴィノックの『知識人の時代』*Le siècle des intellectuels* では軽視されている、会合に参加したドイツやイギリスの知識人にも目が向けられていることは、特筆すべきことだろう。第3章では、ポンティニーからスリジーへの推移部としてドイツ占領時代にアメリカに場所を移して続行された時期とパリ郊外のロワイヨモン修道院で開催されていた1947年から1952年にかけての時期が論じられている。ポンティニー時代は文学作品を主たる議論の対象としていたのに対し、この頃には人文学全体へとテーマが移行していく。

第4章では、各分野の専門家が様々な切り口からスリジーを分析している。第1章から第3章までの部分を合わせてもこの論文集全体の3分の1に満たない量であるので、スリ

ほどの部屋が巧みに組み合わされていた。建物の上端の塔のような部屋は、夜は寂しくこわそうだった。プロテスタントとの抗争のおりに、防備のために加えられた設備もあるようで、そんな話を聞くと、夜風にゆれる楡の大木は不気味だった。私たちは食堂にあてられた広間で、簡素ではあるがいかにフランスの田舎らしいたっぷりとした食事を供された。参加者は一人、また二人と車で到着し、食堂に集まってきた。古い城館を宿舎にしたせいかわ、参加者たちはまるで芝居の舞台上に登場するように、浮き浮きとはしゃいでいた。一階の大図書室がシンポジウムの発表場所に当てられ、テーブルを囲んでその準備や打ち合わせが行われていた。」[辻 1999: 257]

2 対話の名手であった哲学者デジャルダンにはソクラテスというニックネームで呼ばれていた。

3 [Chaubet 2000]

4 [Paulhan 2002]

ジーの学会に関する論考の多いこの書物は、100年を振り返ると言いながら20世紀後半にばかり注目している点ではバランスが悪いと言わざるを得ない。スリジーはポンティニーと比べ資料も豊富で、かなりの数の学会は後に論文集として出版されている。それから、寄稿者の多くが発表者として、あるいは監修者としてスリジーに関わっていた。その結果として、精緻な分析がなされているのは当然のことだろう。フランスには古くから、サロン文化の伝統がある。デジャルダンの娘にあたるアンヌ・ウルゴン＝デジャルダンがサロンの女主人さながら、レイモン・アロン、アルベール・ベガン、ジョルジュ・プーレ、モーリス・ドゥ・ガンディヤックなどの第一級の知識人をブレインにしつつ、スリジーを運営していった様子が描かれている。そして、彼女の娘であるエディット・ウルゴンが理系の研究者であったため、80年代以降のスリジーではサイエンス関係の学会も頻繁に開かれるようになるのである。以下、各章におけるブリリアントな論考を軸とし、ポンティニーやスリジーという場の特殊性を浮かび上がらせてみたい。

第1章のトレビシュによる基調講演「知識人の歴史に決着をつけるために」では、まず、スリジーというのは様々な意味で遺産であり、スリジーはポンティニーを参照することなしには理解不可能であると語られる。遺産というのは、創始者のデジャルダンから孫であるエディット・ウルゴンまで運営責任者が親族であるからである。そして彼は、知識人にとってのスリジーは演劇人にとってのアヴィニョンと等価であるとするルイ・ボダンの意見を紹介しながら（私は第二次大戦後に現代音楽の作曲家達が集っていたダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会も似た役割を持っていたと思う）、ポンティニーやスリジーにおける共同生活や口頭での友情を育む意見交換や余暇と仕事の区別を消失させる雰囲気強調している。また、トレビシュは、階級を重視するピエール・ブルデューの知識人論を起点として、ポンティニーやスリジーは良くも悪くもフランス独特のサロンの貴族文化に近いと結論付けている。それから、ポンティニーにしる、スリジーにしる、パリから離れた地方であることが強調されている。

第2章では、まず、ポンティニーの母体となった「真理のための同盟」L'Union pour la Véritéが詳細に分析されている。ショーベの論考「ポンティニー旬日懇話会の起源に向けて」では、19世紀的なナショナリズムに反対するポンティニーに関わった文学者達のコスモポリタニズムが、世界文学の概念とともに論じられている。フランスの作家だけでなく、フィレンツェの雑誌『ラ・ヴォーチェ』*La Voce* 周辺のイタリアの知識人やポンティニーに招待されたが参加を断ることになるシュテファン・ツヴァイクやリルケといったドイツ語圏の文学者やインゼルの出版社の開かれた精神にまで目を配っている点で優れた論考である。ベルナール・バイヨの論考「対話と声 ポンティニーと文学者達のネットワーク」では、ポンティニーに栄光をもたらしたのはポール・クローデル、ジッド、ヴァレリー、フランソワ・モーリヤックと判断が下されている。また、バイヨはマルセル・ブルーストがポンティニーでよく話題になったことを書いているが、時間論という関連で脚注において、貴族的側面が濃厚である九鬼周造のポンティニーでの発表に言及している。九鬼は、ポンティニーに参加した唯一のアジア人であろう。「日記と書簡に描かれたポンティニー旬日懇

話会」と題されたクレール・ポーランの論考では、まず、ゲシュタポによってポンティニーのアーカイヴが破壊され資料が少ないことが説明されている。この論考で紹介されている哲学者ジャン・ヴァールの“ポンティニーのような会合の危険性は、個人の考えが消えることである”という葛藤は興味深い。また、現在でも読み継がれているスペインの文化史家エウヘニオ・ドールスの『バロック論』*Du Baroque* (1935年)の下地になったのが1931年のポンティニーにおけるバロックをめぐるドールスの発表であったことも、ポーランは強調している。

クラウス・グロッセ・クラークトの論考「ポンティニーにおけるドイツの知識人達」とデヴィッド・スティールの論考「ポンティニーにおけるイギリスの存在感」は、何よりもポンティニーの国際性を説明するものであろうし、スリジー時代はポンティニー時代と比べ対外的にはやや閉じているように思わせるものである。クラークトの論考では、まず、第一次大戦で息子を失ったにも関わらずデジャルダンがアクシオン・フランセーズのような反ドイツにならなかったことに触れ、ポンティニーに深く関わったドイツ人から、クルティウス、ハインリヒ・マン、ベルンハルト・グレットウイゼンに絞り、三人を比較対照させ、フランス的な礼節をわきまえているグレットウイゼンを高く評価しようとしている。しかし、クルティウスにもフランス的な貴族性が十分にあり、それゆえにルクセンブルクの貴族的な大ブルジョワであるアリーヌ・マイリッシュを中心とする知識人サークルの常連だったため私はこの考えには賛成できない。ポンティニーが専門家の集まる会合ではないことを指摘した、1922年に発表されたクルティウスによるポンティニー論⁵は広く知られているものである。また、ジャックマル＝ド・ジェモーが述べているように⁶、各国の文学史を相対化する『ヨーロッパ文学とラテン中世』*Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*を主著とするクルティウスは、若い頃からヨーロッパの理念を持っていたわけではなく、この理念の形成過程においてポンティニーに参加した経験が大きかったのである。それから、クラークトは、クルティウスが1923年のポンティニーへの参加を拒否した理由を、ヴェルサイユ体制が生んだ紛争であったフランス軍とベルギー軍によるルール占領であると考えている。スティールの論考では、英国モダニズム文学の一つの拠点だったブルームズベリー・グループのポンティニーへの高い関心が論じられている。ケンブリッジ大学出身者の多いこのグループのフランス近代美術との関係は有名だが（セザンヌを英国に導入したロジャー・フライも1925年のポンティニーに参加している）、エリートフランス人が集うポンティニーと関連させようとする視点は新鮮である。フランス文学に詳しい英国人であるリットン・ストレイチーやエドムンド・ゴスと、イギリス文学に強いフランス人であるデュ・ボスやヴァレリー・ラルボーが定期的に会う場所、それがポンティニーだったのである。とはいえ、使用言語がフランス語であるポンティニーに参加することに躊躇した英国人はいくらかいたという。さて、ブルームズベリー・グループの特徴としてよく指摘される同性愛的側面がポンティニーにも当てはまるだろうか。

5 [Curtius 1925 : 327-344]

6 [Jacquemard-de Gemeaux 1998 : 66-83]

第3章においては、第二次大戦時のドイツによるフランス占領の時代に、アメリカ東海岸のマウント・ホリオークで開催されていたポンティニーを対象としたローラン・ジャンピエールの論考「アメリカでのポンティニー」によって、アメリカに亡命したハンナ・アーレントなどのヨーロッパの知識人達の姿が描かれている。運営の中心であったのは、哲学者ヴァールと文学史家ギュスターヴ・コーエンと美術史家アンリ・フォションである。この時期のポンティニーではドイツ系の亡命知識人も多く参加したようである。ジャンピエールは、マウント・ホリオークでの会合で行われた、フランスの画家であるアンドレ・マッソンと美術史家メイヤー・シャピロの弟子である理論的なアメリカの画家ロバート・マザーウェルによる論戦が、アメリカでのポンティニーが現代美術の中心がパリからニューヨークに移ることを示すおそらく初めての機会であったと考えている。アメリカでのポンティニーは第二次大戦後にフランスの亡命知識人達が帰国する頃に終了する。1952年にスリジーが始まるまでパリ郊外のロワイヨモン修道院で続けられていた時期を扱ったショーベの論考「ロワイヨモンでのポンティニー」では、戦後のフランスの中心的な知識人であるジャン＝ポール・サルトルは若い頃にポンティニーに参加していたにも関わらず、ロワイヨモンでの会合に対し距離を置いていたことが述べられている。

20世紀前半のフランス文学を担ってきた『新フランス評論』の代表的な文学者は、古典主義的な筆致を得意としたジッドである。スリジーでの学会を多面的に扱う第4章では、ジッド文学を理想とするアンヌ・ウルゴン＝デジャルダンの自己形成の過程から彼女が責任者を務めるスリジーの運営の様子までを主題としたニコル・ラシーヌのフェミニズム的な論考「アンヌ・ウルゴン＝デジャルダンの肖像」によって始まる。アンヌの人脈の広さに注目しつつラシーヌは、『新フランス評論』周辺の文学者の中でアンヌが特に親しかったのは（アンヌの発案によりスリジーでこの雑誌に関わった作家達に関する学会が何度も開かれた）、デュ・ボスとアンドレ・モーロアであると述べている。また、文学者としては大成できなかった彼女のコンプレックスも語られている。そして、『新フランス評論』のグループはシュルレアリスト達や雑誌『テル・ケル』*Tel Quel*のグループとは異なり喧嘩や排除が少ないが（友情こそがポンティニーの象徴だった）、ホモセクシャルの要素があったとアンヌが考えていたことを紹介している。彼女の夫である西洋古典学の研究者ジャック・ウルゴンのソルボンヌ大学の同僚であったアロンなどを彼女はブレーンにしていたようである。行動的なアンヌは、アルジェリア紛争の際には、反ドゴールの立場を貫き通していたという。1958年にアロンが監修者となり、歴史家アーノルド・トインビーに関する学会が開催されているが、私見では卓抜なトインビー論⁷を1948年に発表したクルティウスとアンヌが長い間友人であった事実と無関係ではないように思われる。ラシーヌは1955年にナチ加担をしたため多くのフランス人から反感を買っていた哲学者マルティン・ハイデガーをアンヌはスリジーに招いて成功させたことに注目を促している（ウラジーミル・ジャンケレヴィッチのように招待されながらも参加を拒否した知識人もいたのだが）。文学や思

7 [Curtius 1954 : 356-382]

想が議論の対象だったポンティニー時代と比べ、スリジー時代では分野が人文学全体へと多極化していくことになる。そして、ジッ的な文学とはかなり異なる前衛文学や構造主義の文学理論や精神分析や言語学や構造人類学の学会も開催されていくのだが、責任者であるアンヌは受け入れてゆくのである。

次に、レミー・リーフェルによる「20世紀フランスの知的世界におけるスリジー」では数値を多用する典型的な社会学者の手つきで、どのようなテーマが50年間のスリジーで取り上げられたのか分析されている。20世紀後半のフランスにおいて、平均するとスリジーでは1年につき8つの学会が開催されており、その40%が文学であり、11%が哲学であるという。彼の調査した392の学会のうちで、65%の257の学会が、記録集として出版されているようだ。リーフェルは、文学関係のスリジーの特徴として作家本人を学会に招いたことを挙げているが（例えばミシェル・ビュートル、アラン・ロブ＝グリエ、クロード・シモン、ナタリー・サロートといったヌーヴォー・ロマンの作家達）、マルグリット・デュラスやサミュエル・ベケットは参加を断固拒否した事実も紹介している（デュラスが拒否したのは彼女がヌーヴォー・ロマンの文学者の中で唯一、文学理論に消極的であったことと関連すると私は思う）。

スリジーでの学会のうちで最も知られているものが1972年のフリードリヒ・ニーチェ特集であろう。この学会で発表したジャック・デリダも、「制度に抗する哲学のモデル」という回顧的な論考をこの論文集に寄稿している。デリダは長く参加してきたスリジーの思い出を（「私が初めて来た1959年と比べてみても、スリジーの壁も図書室も変わっていないのだ」）、彼の師であり多くのスリジーでの学会を監修してきたガンディヤックを皮切りに、豊崎光一も含めた友人達の名を挙げながら語ってゆく。デリダはポンティニーの頃は記録をとることなく自由な議論が交わされていたことを強調する。そして、ポンティニーの常連であったデュ・ボスやマルタン・デュ・ガールを偉大な作家と呼び、スリジーへと受け継がれたポンティニーの、国の政府から独立した国際的な機関としての側面や、大学とは異なる制度的なものに抗している側面なしには、デリダが1983年から始める国際哲学コレクションはありえなかったことを告白している。ただ、デリダは学際性という言葉は好きではないようである。

アンヌ＝マリー・デュラントン＝クラボルによる「ポンティニーとスリジーのアメリカとの関係」は、アメリカとの関係に触れた論考である。60年代以降のフランスの文学理論や現代思想は、日本に負けず劣らずアメリカでも大学人の中で輸入されていた。その輸入のためにスリジーに参加したアメリカの学生の「私にとってのスリジーは、カルティエ・ラタンの本屋のようなもの」というフレーズが引用されている。一方、精神科医アンヌ・クランシエによる「精神医学や精神分析や心理学に関する学会」では、彼女がオーガナイズしたスリジーでの初めての精神分析の学会である1962年の『芸術と精神分析』L'art et la psychanalyseの成立過程の様子が描かれていて面白い。最初にアンヌ・ウルゴン＝デジャルダンに企画を持ち込んだとき渋い顔をされたので、監修者としてガストン・バシュラールの名を挙げると目を輝かせるアンヌ・ウルゴン＝デジャルダン。しかし、バシュラール

からは誘いは嬉しいが老体なのでスリジーに移動できないから断ると。代わりに、アンドレ・ベルジュとポール・リクールに監修を引き受けてもらうことに。発表者としてロラン・バルトを招待したが、テーマには関心があるが参加できないという風に。それから、フランソワーズ・シモネ＝トゥナンの論考「ポンティニーやスリジーでの自伝研究」によると、従来低く位置づけられてきた自伝というジャンルに注目する契機となったのが、ポンティニーでの1925年の自伝特集らしい。この時、議論を引っ張ったデュ・ボスの“自伝というのは、非芸術家がやる仕事である”という発言は印象的である。詩は翻訳できるものではない。アルレット・アルベール＝ピロの論考「スリジーにおける詩と詩人達」では、外国人の詩人達の出会いがスリジーでは少なかったことが報告されている。彼は、作家フィリップ・ソレルスの企画した1972年の野心的なアントナン・アルトール&ジョルジュ・バタイユ特集では、露骨な性描写で知られる作家ピエール・ギヨタも参加したことも紹介しており興味深いところである。

アンヌ・ウルゴン＝デジャルダンの死は1977年である。80年代のスリジーの特徴は、認知科学やオートポイエーシスや科学史の学会がスリジーで増加していったことである。これは数学研究者であったエディット・ウルゴンの意志によるものである。科学哲学者ダニエル・アンドレルの論考「スリジーの城における運命の悪戯と数々の出会い」では、科学を扱う学会でも諸分野の境界が曖昧になるような力がスリジーという場所にはあることが述べられている。

この論文集により我々は初めてポンティニーとスリジーの双方を同時に捉えることが可能になる。フランスが世界の中心であった時代は終わった。この書物は、かつての自国中心主義ではないフランスを想像する上で、有益な材料を与えるものである。そして、クルティウスにとってのポンティニーやデリダにとってのスリジーについて関心を持つ人々によって、この書物は長く読み継がれることになるだろう。

参考文献

- Chaubet, François., 2000, *Paul Desjardins et les Décade de Pontigny*, Presses Universitaires du Septentrion, Villeneuve d'Ascq.
- Benfey, Christopher. and Remmler, Karen., (eds), 2006, *Artists, Intellectuals, and World War II : The Pontigny Encounters at Mount Holyoke College 1942-1944*, University of Massachusetts Press, Amherst.
- Caws, Mary Ann. and Weight, Sarah Bird., 2000, *Bloomsbury and France: Art and Friends*, Oxford University Press, New York.
- Curtius, Ernst Robert., 1925, *Französischer Geist im neuen Europa*, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart.
- 1948, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Francke, Bern.
- 1954, *Kritische Essays zur europäischen Literatur*, Francke, Bern.

- Dieckmann, Herbert und Jane M, (hg)., 1980, *Deutsch-französische Gespräche :1920-1950 ; la correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles DuBos et Valéry Larbaud*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main.
- Duranton-Crabol, Anne-Marie., Racine, Nicole. et Rieffel, Rémy., (sous la direction de), 2008, *Pontigny, Rouyaumont, Cerisy : au miroir du genre*, Éditions Le Manuscrits, Paris.
- Gide, André., 2011, *Correspondance avec Paul Desjardins*, Jacques Heurgon & Anne Heurgon-Desjardins, ÉDITION DES CENDRES, Paris.
- Gide, André. et Mayrisch, Aline., 2003, *Correspondance 1903-1946*, Gallimard, Paris.
- Jacquemard-de Gemeaux, Christine., 1998, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): Origines et cheminements d'un esprit européen*, Peter Lang, Bern.
- Masson, Pierre., et Wittmann, Jean-Michel., (sous la direction de), 2011, *Dictionnaire Gide*, Classiques Garnier, Paris.
- Paulhan, Claire., (sous la direction de), 2002, *De Pontigny à Cerisy. Un siècle de rencontres intellectuelles*, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, Paris.
- 澤田直, 2007, 「1928年の九鬼周造とサルトル — ポンティニーの夏期懇話会をめぐって」, *Lilia candida* (37), 白百合女子大学フランス語フランス文学会, 東京, pp.21-27.
- 辻邦生, 1999, 『のちの思いに』, 日本経済新聞社, 東京.
- Winock, Michel., 1997, *Le siècle des intellectuels*, Seuil, Paris.
- 吉井亮雄, 2000, 「1922年のポンティニー旬日懇話会：ジッドのポール・デジャルダン宛未刊書簡」, 『ステラ』第19号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 福岡, pp.127-140.
- Zweig, Stefan., 1970, *Die Welt von Gestern*, Fischer Taschenbuch, Frankfurt am Main.

(2011. 11. 24 受理)